

橋口 亘

VIII 上月行敬『琉球人往来筋脈之図』に描かれた宇和島藩伊達家上屋敷の井戸 一同屋敷跡の発掘調査で検出された井戸遺構との比較を中心に一

1. はじめに

大名屋敷が軒を連ねた近世都市「江戸」の麻布龍土（現在の東京都港区六本木）には、宇和島藩伊達家の上屋敷が所在した【図1】。宇和島藩士・上月行敬の『琉球人往来筋脈之図』には、この屋敷の姿が描かれている〔丹羽2017〕【図2】。

本稿では、上月行敬によって描かれた宇和島藩伊達家上屋敷内の井戸と、同屋敷跡で検出された井戸遺構を比較しながら考察を行ってみたい。

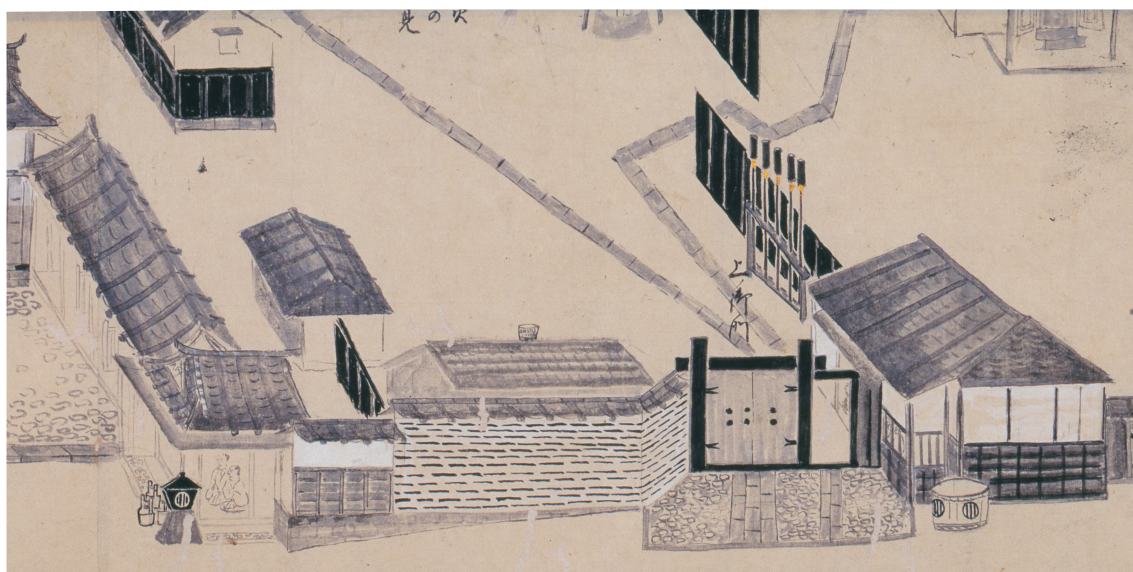
2. 宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡の発掘調査で検出された井戸

東京都港区六本木7丁目に所在する宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡では、新国立美術展示施設（国立新



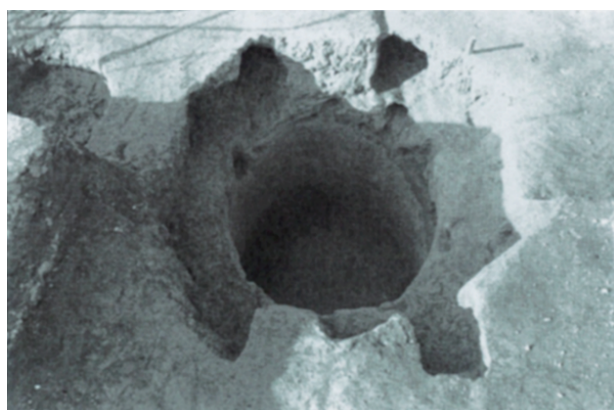
【図1】『東都麻布之繪圖』に図示された宇和島藩伊達家屋敷の屋敷地（画面下部中央）

『東都麻布之繪圖』（国立国会図書館デジタルコレクション上のタイトルは「江戸切絵図」麻布絵図）／作図：戸松昌訓／板元：尾張屋清七／発行年：嘉永4年（1851）
〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉

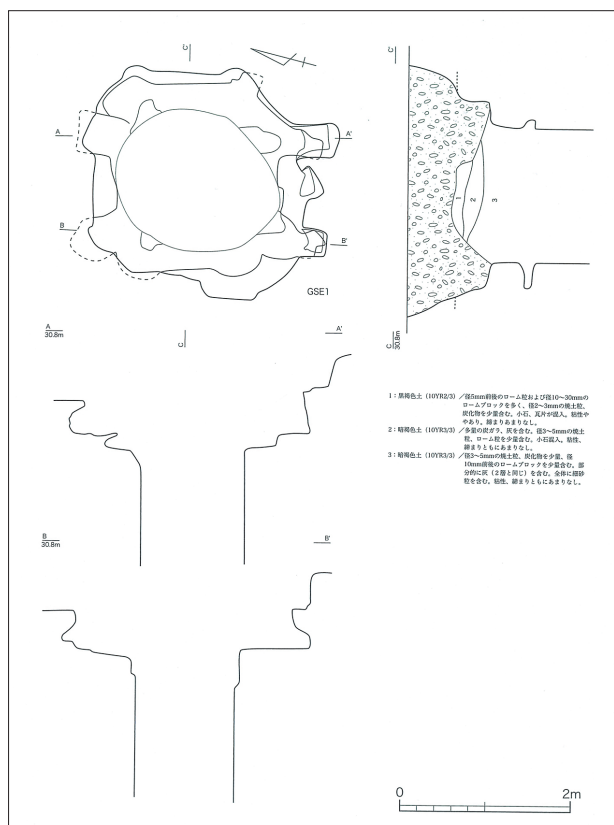


【図2】『琉球人往来筋脈之図』に描かれた宇和島藩伊達家屋敷（部分）
〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

美術館)の建設に伴う発掘調査(本調査)が、2001年から2002年にかけて実施されて、建物跡などの遺構が数多く検出され、陶磁器などの遺物も大量に出土し、検出された遺構のうち、G区の井戸(GSE1)は、嘉永5年(1852)の三浦義質『江戸麻布龍土御屋敷絵図』[柚山1990](本書Ⅳ-11掲



【図3】宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡の発掘調査で検出された井戸(GSE1)の写真



【図4】宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡の発掘調査で検出された井戸(GSE1)の実測図

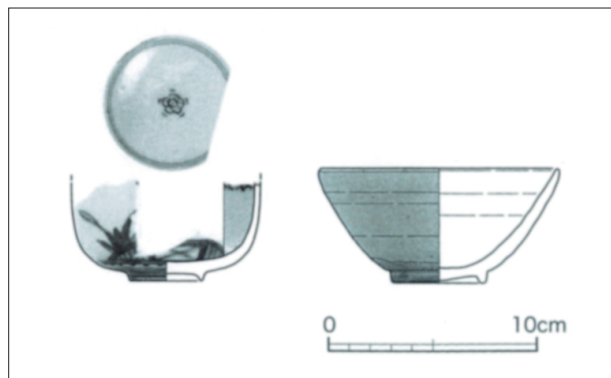
〈図3・4・6は、西山博章2003年『宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡—新国立美術展示施設(ナショナルギャラリー・仮称)建設に伴う調査—』東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第134集 財団法人 東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センターより引用 ※一部改変〉

載)に図示された「火之見下御長屋」の傍ら(南側)に位置する井戸【図5】に該当することが指摘されている[西山2003]。

この井戸について、発掘調査報告書では、「遺構上面は削平されており、本来はやや下がったところにある木枠部分が確認面となっている。規模は直径



【図5】『江戸麻布龍土御屋敷絵図』に示された「火之見下御長屋」の傍らにある井戸の位置(⊕印)
〈本書Ⅳ-11掲載の嘉永5年の三浦義質『江戸麻布龍土御屋敷絵図』(個人蔵)の部分概略図〉※同図や柚山1990・西山2003掲載図を参考に作図



【図6】井戸(GSE1)から出土した遺物
〈左:肥前系染付碗/右:瀬戸・美濃系陶器碗〉

1.6 m × 1.95 m の楕円形を呈しており、上面に井桁状に組まれた木杵の痕跡が確認された」とされ、断ち割り調査時に 5 m 程度掘り下げた地点で湧水点に達したため底部まで掘り下げることができず、側板等も確認されなかったことなどが報告されており、また当該井戸からの出土遺物については「上層を中心に 142 点出土している」と報告され、井戸の廃絶時期については「覆土中にレンガなどの近代の遺物も多量に投げ込まれていたことからこの井戸の廃絶時期は明治期まで下ることが明らかである」とされている [西山 2003]。

3. 『琉球人往来筋脈之図』に描かれた井戸

宇和島藩士・上月行敬は、『琉球人往来筋脈之図』の中で、麻布龍土に所在した宇和島藩伊達家屋敷の表御門の周辺を描いている [丹羽 2017]。この図中の伊達家屋敷の敷地内には一基の井戸が描かれている【図 7・8】 [井上 2018]。その位置は前掲の嘉永 5 年『江戸麻布龍土御屋敷絵図』に図示された「火之見下御長屋」の傍ら（南側）に位置する井戸の印の位置とほぼ一致しており、この井戸が上月によって『琉球人往来筋脈之図』に描かれたと考えられる。

当該井戸は、上月によって灰色で円筒状に表現されている。また、井戸の周辺には柱のようなものが描かれている。

4. 考察

前述したように、上月行敬によって描かれた宇和島藩上屋敷内の井戸【図 8】の位置は『江戸麻布龍土御屋敷絵図』に図示された「火之見下御長屋」の傍ら（南側）に位置する井戸の印【図 5】と一致している。つまり、上月行敬によって描かれた宇和島藩上屋敷内の井戸【図 8】は、宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡の発掘調査で検出された G 区の井戸（GSE1）と同一の井戸であることが指摘できる。

発掘調査で検出された G 区の井戸（GSE1）の掘り込みの平面プランは円形を呈しており、上月が描いた井戸の形状が円筒状である点と共通する。ただ



【図 7】『琉球人往来筋脈之図』に描かれた宇和島藩伊達家屋敷の上ノ御門周辺部分

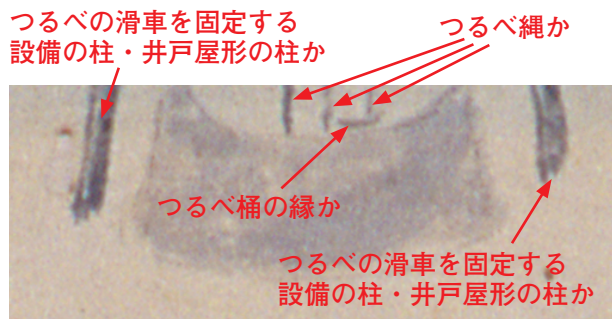
（朱書き部分は橋口加筆）〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

※画面の左上の位置に井戸が描かれている。



【図 8】『琉球人往来筋脈之図』に描かれた宇和島藩伊達家屋敷の井戸（図 7 の部分拡大）

〈鹿児島大学附属図書館蔵〉



【図 9】『琉球人往来筋脈之図』に描かれた宇和島藩伊達家屋敷の井戸とその附属物等

（図 8 に朱書きで橋口加筆）

〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

し、発掘調査で検出されたG区の井戸（GSE1）の上面では、「井桁状に組まれた木枠の痕跡」が確認されている〔西山 2003〕ものの、この点、上月の描いた当該井戸には井桁状の表現は見受けられない。こうしたことから、少なくとも上月が当該井戸を描いた時期、当該井戸の上部外観については、外側から見て井桁状（角筒状）ではなく円筒状に描かれるような形状を呈していた可能性が考えられよう。

また、上月は当該井戸の周辺に柱のようなものを描いており、つるべの滑車を固定する設備の柱・井戸屋形の柱である可能性が高い。また、つるべ縄や、つるべ桶の縁部分と考えられる描写もみられる【図9】。

5. おわりに

上月行敬が『琉球人往来筋脈之図』に描いた近世都市江戸の姿は、正確な描写と不正確な描写が入り混じっている内容であるが〔丹羽 2017〕、宇和島藩伊達家屋敷の描写は、自藩の藩邸という理由もあり、より高いモチベーションで正確な描写がなされたことが考えられる。殊に、他の絵図面や発掘調査で検出された井戸と位置が合致し、そこに実在したことがビビッドに確認できる当該井戸の描写は、『琉球人往来筋脈之図』が持つ、近世都市江戸の都市空間をおおむね正確に描写した絵画史料としての側面を象徴する一例といえるだろう。

【引用・主要参考文献】（五十音順）

- 井上淳 2008 「宇和島藩江戸勤番武士の暮らし」『特別展 掘り出されたえひめの江戸時代—くらし百花繚乱—』愛媛県歴史文化博物館
- 井上淳 2018 「宇和島藩の麻布龍土屋敷」『伊予の古地図～国絵図から村絵図まで～』伊豫史談会
- 西山博章 2003 『宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡—新国立美術展示施設（ナショナルギャラリー・仮称）建設に伴う調査—』東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第134集、財団法人 東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター
- 丹羽謙治 2017 「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』について—鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ—」『雅俗』16、雅俗の会
- 柚山俊夫 1990 「江戸の宇和島藩上屋敷絵図について」『伊豫史談』279・280 合併号 伊豫史談会

【資料等】

- 『琉球人往来筋脈之図』：上月行敬／〔嘉永4年（1851）〕／鹿児島大学附属図書館蔵
- 『琉球人行粧』：上月行敬／〔嘉永4年（1851）〕／鹿児島大学附属図書館蔵
- 『東都麻布之繪圖』：戸松昌訓／〔板元〕尾張屋清七／嘉永4年（1851）／国立国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクション）／※国会図書館デジタルコレクション上のタイトルは「〔江戸切絵図〕、麻布絵図」
- 『江戸麻布龍土御屋敷絵図』：三浦義質／嘉永5年（1852）／個人蔵

【謝辞】

本稿作成にあたっては、「日本近世生活絵引—琉球人行列と江戸編—」編纂共同研究班メンバーの皆様方をはじめ、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、鹿児島大学附属図書館等、そのほか多くの方々から御協力・御教示を頂いた。特に研究班の丹羽謙治氏には文献調査や資料等の入手にあたって、たいへんお世話になった。記して感謝の意を示したい。